

平行棒における＜後ろ振り上がり前方屈身宙返り支持＞の成立条件と理想像に関する構造分析的研究

齋藤 卓*

Structural Analysis of Forming Conditions and Ideal Image of “Backward uprise and salto forward piked to support” on the Parallel Bars

SAITO Taku*

1. はじめに

現在、体操競技のルールでは審判の判定に対してコーチや選手は異議を申し立てることが認められている (F.I.G., 2013; pp.12-13)²⁾。これは審判による判定に間違いや解釈の違いが生じうることを前提としたルール上の措置である。しかし、選手側が審判の判断に対して不信感を抱くことは、競技を行う上で好ましいことではない。

金子 (1974; pp.212-213)⁵⁾ は技の成立条件に関する認識の不一致が起こる要因として技の名称による問題を挙げており、運動表記の明確さの必要性を指摘している。技名表記の曖昧さは技の理想像決定や採点にも影響を及ぼすのである。

本研究は技名表記が曖昧になっている技を取り上げ、発生運動学的立場 (金子、2002、2005、2007、2009)⁷⁻¹⁰⁾ から技の構造分析を行うことによって技の成立条件を明確にし、さらに理想像設定に方向性を与えるものである。

2. 研究の方法

本研究では、発生運動学における体系論的構造分析に基づいて技の成立条件を検討する。発生運動学における体系論的構造分析は、ソシユール言語学の価値体系論を基礎にして動感言語の体系論として展開されることが特徴である (金子、2007; pp.65-66)⁹⁾。

渡辺 (2011; p.30)¹¹⁾ によると「体系論的な構造分析においては、一つの動感形態は他の動感形態との形態学的な差異性を確定するために、『～でない』という否定性によって共存価値が確認される」、「発生運動学における体系分析における動感形態の共存

価値の確認は『主語形態』の体系論的な『縁取り分析』 (金子、2007; p.138)⁹⁾ によって遂行され、その技の独自特性によって『他の類似した技とは異なる』ことが確認される (渡辺、2011; p.30)¹¹⁾ という。体系論的構造分析の縁どり分析とは、現象学的な形態学分析 (フッサール、1984; p.35 以下)⁴⁾ により、類似した動感形態の境界を確認する手続きを意味しており (金子、2007; p.193)⁹⁾、フッサールの「本質直観の方法論」 (フッサール、1974; pp.327-336)³⁾ が用いられる (渡辺、2011; p.30)¹¹⁾。

3. ＜後ろ振り上がり前方屈身宙返り支持＞の名称による成立条件の検討

本研究で取り上げる技は平行棒における＜後ろ振り上がり前方屈身宙返り支持 (日本体操協会、2013; p.159)²⁾ (図1)＞である。この技は、1967年にベレジュニコフ選手によって発表されたものであり、すでに50年近い歴史を持つ (C・A・アレクペロフ、1978; p.92)¹⁾。金子はすでに『体操競技のコーチング』 (1974; p.48)⁵⁾ の中において、＜後ろ振り上がり前方屈身宙返り支持＞と命名されるには問題があると指摘しているが、名称の変更がなされなかった背景を考えると構造上の問題点について深く理解されなかったからではないかと考えられる。そのため、より、詳細な検討を示すことが求められると考えられる。

(1) ＜後ろ振り上がり＞の名称について

＜後ろ振り上がり＞は腕支持後ろ振りから倒立へと移行する技である。金子 (1974; p.48)⁵⁾ によると＜後ろ振り上がり＞という技は回転未満の左

* 筑波大学体育系
Faculty of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba

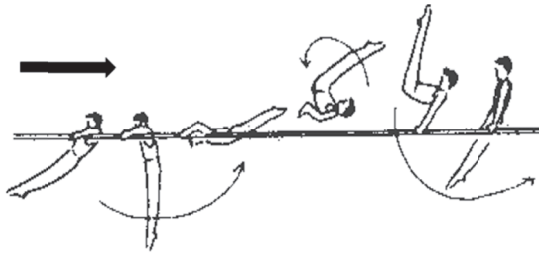


図1 <後ろ振り上がり前方屈身宙返り支持>
(F.I.G., 2013 ; p.1142) より転載)

右軸回転の<上がり>に分類され、運動の構造に、「後ろに振上げられてから、その反対方向の左右軸回転ないし静止状態への終末局面を持たなければならぬ」という。この<後ろ振り上がり>から<前方宙返り>を合成しようとする、<後ろ振り上がり>において左右軸回転を消失させた後に外力なしに<前方宙返り>を行うことになるので、この表記に忠実に従う実施は現実的には無理がある。しかし、<倒立から前方宙返り支持 (Aus dem Handstand, Salto vorwärts in den stütz)> (F.I.G., 2013 ; p.111)²⁾ という技があり、<後ろ振り上がり倒立>から背面側に倒れながら背面支持を行うことは可能である。こうした理解に基づけば、<後ろ振り上がり>の勢いによって倒立で跳び上がり、背面支持になる運動形態として実施する可能性が考えられる (図2)。しかし、これでは宙返りとしての回転はほとんど消失し、空中局面を明確に示すことは難しくなるであろう。この場合には、<後ろ振り上がり倒立>と<前方宙返り>の別々の技の組み合わせと理解されるべきであり、<後ろ振り上がり前方屈身宙返り支持>とは別の技として認識されることになる。

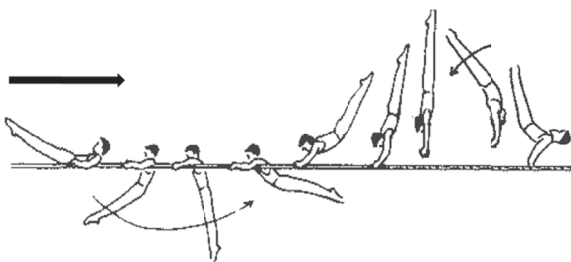


図2 <後ろ振り上がり倒立から前方宙返り支持>
(F.I.G., 2013 ; p.1142) より筆者によって改変)

(2) 技名から<上がり>の名称を外した場合の問題性

上記により、<後ろ振り上がり>の名称を使った場合の問題性が指摘された。そこで次に技名表記に「上がり」の名称を用いない場合を考察していく。

「上がり」の名称を外すとこの技は<腕支持後ろ振り前方宙返り支持>という技名表記が考えられる。この表記に基づく腕支持体勢から宙返りを伴って終末局面が支持体勢になるという理解が生じる。この場合、<上がり>という運動基本語 (金子、1974 ; pp.47-49)⁵⁾ がないため、体勢変化による難易性を示したのではなく、終末局面が支持体勢になることに対して価値が与えられるということが考えられる。そうすると、宙返りの後に終末局面が腕支持や懸垂になる場合も別々の技として区別する必要が生じることになり、<腕支持後ろ振り前方宙返り腕支持 (図3)>にも価値が与えられなければならない。その場合、<腕支持後ろ振り前方宙返り支持>の失敗として現れた形態なのか、<腕支持後ろ振り前方宙返り腕支持>を行った形態なのか、技の縁取りを示すことができず、採点に混乱を生じさせる可能性が出てくる。それゆえ<上がり>の表記を外すことは適当ではないと言える。

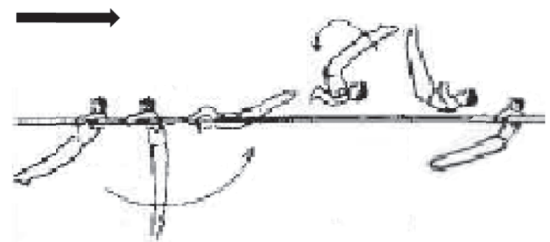


図3 <腕支持後ろ振り前方宙返り腕支持>
(F.I.G., 2013 ; p.1142) より筆者によって改変)

(3) <後ろ振り上がり前方屈身宙返り支持>の名称による成立条件の検討のまとめ

これまでの考察をまとめると、<後ろ振り上がり前方屈身宙返り支持>という表記の場合、<後ろ振り上がり倒立から前方宙返り>を行った組み合わせ技との区別が曖昧になってしまう。そのため、<振り上がり>という規定詞を使うことは技の構造を理解する上で不適切であると考えられる。また、上がりという規定詞を除いた場合を考察しても他の技との縁取りを示すことはできなかった。

4. <前方翻転逆上がり支持>の名称による成立条件の検討

そこで次に金子が提唱している表記に基づいて成立条件を検討する。

金子によると、この技は「<振上がり>の概念は破壊されて」(金子、1974 ; p.49)⁵⁾ おり、「吊輪の<前方翻転逆上がり>と同様に<回転=上がり>の課題をもって」(金子、1974 ; p.49)⁵⁾ いると主張し

ている。<逆上がり>とは、「360度の後方回転と、懸垂から腕立て支持への上方移動」を伴う上がり技として規定される（金子、1984；p.156）⁶⁾。

演技の中で用いられる上がり技の場合、次の技へ効果的に連携される技術を内包している必要がある。したがって、<後ろ振り上がり前方屈身宙返り支持>を<上がり>技として捉えた場合は、次の技へスムーズに組み合わせることが目的となるはずである。そうすると、この技は、空中局面に大きさを求めるものではなく、次につなげる運動を有利に行うための回転制御技術を内包することが求められることになる。つまり終末局面においては腰の高い背面体勢で支持して、技の先取りが行える体勢を獲得することが理想として求められていくことになる。

5. 結 語

本研究では、これまでに用いられてきた技名表記について表記論的縁取り分析を行った。その結果、国際体操連盟が定めている<後ろ振り上がり前方屈身宙返り支持>という表記では技の区別が明確にできないため、理想像が設定できないことが明らかとなった。そこでこの技を上がり技として設定することによって、他の技との区別が明瞭になり、理想像も明確に設定できることが示された。したがって、この技は<前方回転逆上がり>の表記が適切であると考えられる。

付 記

本報告は、コーチング学研究第29号（2015）に

研究資料として掲載した論文に、加筆・修正を施したものである。

文 献

- 1) C.A. アレクペロフ(加藤澤男監修/小野耕三訳)(1978): ソ連体操トレーニングシリーズ I 平行棒, ベースボールマガジン社.
- 2) F.I.G. (2013): Wertungsvorschriften Männer 2013, Internationaler Turnerbund.
- 3) フッサル: 渡辺二郎訳 (1974): イデーン I-I, みすず書房.
- 4) フッサル: 渡辺二郎訳 (1984): イデーン I-II, みすず書房.
- 5) 金子明友 (1974): 体操競技のコーチング, 大修館書店.
- 6) 金子明友 (1984): 教師のための器械運動指導法シリーズ鉄棒運動, 大修館書店.
- 7) 金子明友 (2002): わざの伝承, 明和出版, 2002.
- 8) 金子明友 (2005): 身体知の形成 (上, 下), 明和出版.
- 9) 金子明友 (2007): 身体知の構造, 明和出版.
- 10) 金子明友 (2009): スポーツ運動学, 明和出版, 2009.
- 11) 渡辺良夫 (2011): 体操競技のあん馬における一腕全転向技群の技術開発に関する研究, 平成 23 年度筑波大学博士論文.
- 12) (財)日本体操協会 (2013): 採点規則男子 2013 年版.